安田 葉の「視点」

「WIND BIRDS」展示風景

人口 17 万人、北日本最大の国際港湾を抱える苫小牧市は、工業都市として広く知られている。だが、苫小牧市美術博物館の展示室に足を踏み入れると、その印象は一側面であることを実感できる。

7 月 14 日に始まった美術家安田葉さんによる特集展示「WIND BIRDS」。 作家自身が苫小牧に長期滞在し、工業都市を包み込む豊かな自然を撮影した映像に加え、美術博物館が所蔵する地元画家の絵画や剥製を同時に展示した。その空間では、苫小牧の風土を感じることができる。

「WIND BIRDS」は安田さんの視点だ。時に鳥のように俯瞰し、時に虫の目で見過ごしがちな風景を撮した。その映像作品の軸になっているのが、ある人の営みだった。樽前山麓の奥深くに住む文子さん。長い月日をかけて、自然と調和した美しい里山を築いてきた女性の生き方に、神奈川県海老名市に暮らす安田さんは普遍的な価値を見つけ、作品化した。作家のその目から、そのレンズから何が見えたのだろうか。

2018 年 7 月中旬、苫小牧

安田葉（やすだ よう）プロフィール

2014 年 東京藝術大学大学院美術研究科修了。

生まれ育った神奈川県海老名市を拠点に、これまで県内や北海道、長崎、秋田などを舞台に絵画、写真、映像などの作品を発表。生物の営み、古くから続く人の歴史や異なる文化の出会いと交流などの事柄に強く関心を持ちながら、各地で出会う人や出来事に着想を得て作品を製作している。

—今回、樽前に何度か滞在しながら制作を続けていましたが、まず苫小牧とのつながりには、どのような経緯があったのでしょうか。

去年飛生アートコミュニティー (白老町) で福田さん (苫小牧市美術博物館学芸員) と出会ったのがきっかけで、今年 3 月に入って展覧会が実現できそうという話になって、まず地域のことを知りたいと思い早速 4 月に撮影に来ました。
それでレオさん (樽前 arty +) に樽前山の麓に暮らす文子さんを紹介していただき、すぐに只者ではない方だと感じました。文子さんからは苫小牧の自然を始め、自然の中での暮らし方などたくさんの事を教えていただき、出会ってまだ数ヶ月と期間は短いけど、勝手にずいぶん長い付き合いがあるような感じがしています。

—苫小牧では、主にビデオの撮影を行っていましたが、安田さんの表現はビデオ、造形、インスタレーションなどを駆使しています。それぞれその時々でどのように選んでいますか。
今回は約 3 ヶ月と準備期間が限られていましたし、私が受けた苫小牧の新鮮な

Photo：Fuyuko Satoh

印象を切り取るには映像作品が作りやすいと感じました。外から来た自分が、苫小牧市美術博物館で見たいものは何か、地域を見つめた地元作家の所蔵作品と、現在の苫小牧の姿を写した映像を同じ空間に置くことで、外からくる人や、ここに暮らす人にとっても新たに見えてくるものが見てくれた方にあればと思い構成しました。

—確かに映像と所蔵絵画作品の風景がリンクする瞬間がありました。

ここに暮らす方々が故郷を思い浮かべる時、樽前山があって手前に点在する沼地や目の前の海にたくさんの渡り鳥が飛んでいて、そして大きな港と工場地帯や住宅地という 2 つの世界が心象風景のようにあるのだろうなと歩き回りながら感じていました。文子さんの自然の中での暮らしも、人間は本来こうあるべきだろうなと心から思います。それは私の普段の生活とかけ離れているから特にそう思うのかな。もちろん苫小牧の方にも見てほしいけど、コンピュータや人工物に囲まれて自然と一切触れ合わない私のような人に是非見てほしい展示になったと思います。

—映像を観ると、胸が痛くなったというか、厳しい視線も含まれていると思いました。

文子さんと数日行動を一緒にさせていただいて、今の自分はなんて怠け者なんだと感じました。近くのスーパーで調理された惣菜などを簡単に買って、ゴミをいっぱい出して。文子さんが暮らす場所から苫小牧の中心街まで決して遠くはないけれど、文子さんの森での生活はすべてが手作りで、独自の工夫がされていて、美しいおとぎ話の世界のように感じました。苫小牧特有の植生の変化を追い、季節毎に苫小牧を訪れる渡り鳥のように、様々な視点から街を見つめ、こちら (街) に向こうの文子さんの世界を持って来たいと考えました。

—文子さんと一緒に過ごした中で印象に残っている言葉や光景はありましたか。

文子さんは、簡単にお金で解決するのではなく、目の前にあるものをいかに工夫し生活をより豊かにするとか、傷みそうな食べ物をどう活かすかと常に考えていて、なんでも工夫してみる事が楽しいと仰っていました。実際に色々と食べさせてもらったのですが、どれも本当に美味しい。新鮮な山菜やキノコは特に衝撃的な美味しさでした。全てが初体験で、新鮮な山菜の魅力に取りつかれました。ただ、本人は簡単だと仰っていましたが、わたしの感覚だと収穫の見極めや素材の下ごしらえなどにとても手間がかかっていて、この美味しさはそう簡単に出来るものではないという事がよく分かりました。
文子さんは自然の深い造詣はもちろん、生活の知恵に溢れていて、それは過去の厳しい生活の中で編み出されていて、なんて強い方だと思いました。私だったら一日で逃げ出してしまいそうな過酷な状況を幾度も乗り越えてこられた。その強さと優しさが文子さんの森や、生活道具の端々から感じることができてお話を聞いていて胸がいっぱいになりました。現在は、樽前山の麓の広大な土地に一人でお住まいですが、信じられないほどパワフルで素敵なお人柄もあって、森には常に多くの人が訪れてきます。文子さんの元に集まる人々は個性的な方ばかりで、そんな暮らしは都会の豊かさとは種類が全く違う、心から豊かで贅沢な暮らしだなぁと感じました。

—より便利に、より楽にと発展して行った暮らしがすぐ近くにある中で、自然の中で生きる事は相当に難しいことだと思うんだけど、それでもしっかり選んで生きるってことは神々しく感じますね。

普通は多数の意見に流されがちですよね。それでも自分の意思で行動する。自分で工夫をして発見し、それがうまくいった時に喜びを感じると仰っていて、子供のように純粋で、可愛らしくてなんて感性が豊かな方だろうと思いました。私は文子さんと過ごす中でその感情を忘れていたというより、気づけていなかったなぁと感じました。特に一緒に森の中を歩くと、今まで見えなかったものが見えるように、聞こえなかった音が聞こえるような不思議な感覚がありました。文子さんの森に集う方々と交流する中で、自然を楽しむ感性を常に持つ事ができれば、どんな状況に陥っても楽しく生きて行けるかもしれないと、少し希望をもてたような気がします。

「WIND BIRDS」映像作品より

—山菜などが並ぶ食卓を囲むシーンは最高ですね。

こんな贅沢な食卓はないですよ。お金で買えない大切な思い出で、感謝の気持ちでいっぱいです。

—自然を撮影するのは好きなんですか。

好きですけど全然詳しくなくて、花の名前もチューリップとかひまわりぐらいしか知らなかった。今回小さな花や野草も見つけては教えてもらって、一つ一つ由来やエピソードを聞くと、不思議とカタカナの長い名前でも覚えられました。地元の方にとっては当たり前だろうけど、ありふれていて気づかないような繊細な生き物達を改めてしっかり捉えたいと思いました。

—自分が生まれ育った環境と違う風景に出会ったことで、どのような感覚になりましたか。

私が作っていた立体作品は、ありそうで実際には存在しないものなのですが、実際にこういう風景が見たいなと思って作っていた部分があって、それが重なるような不思議な感覚がありました。
(今回展示した) ガラスケースに入った二つの立体作品は 4 年前に作った大学の修了制作です。制作当時は、コンセプトが先行するような表現に挑戦していくことに疲れや抵抗があって、迷いながら作っていた作品です。苫小牧に来て、過去の自分が作っていたような風景と重なり驚きました。苫小牧市美術博物館は、地元作家の所蔵品や地域の歴史を紹介している複合施設なので、現代アートらしくコンセプチュアルな表現に挑戦するのではなく、この土地やここに暮らす人々の姿を見つめ、私の視点で苫小牧を表現できたらなという想いで、美術と博物の学芸員さんと相談しながら所蔵品を構成させていただきました。今回展示している

「WIND BIRDS」展示風景

私の立体作品は、ありそうで実際には存在しない風景を、ガラス、樹脂、LED など、あらゆる素材で手作りし、ガラスのドームに閉じ込めています。
博物館と美術館にある資料の中にはその境界がとても曖昧なものもあるし、 剥製の姿が現実と離れた姿で保存されていたりする場合もあるので、本物とはなんだろう、真実ってそこまで大事だろうかということを、この空間で感じてもらえたらと思います。

—安田さんは地元神奈川県海老名市で知る人ぞ知る特撮の美術監督に再度光をあてる活動を続けていましたが、少し詳しく教えてください。

それは井上泰幸さん、玲子さんご夫妻です。たまたま私の実家の近くで大きな造形屋を営んでいて、奥さんは彫刻家で、旦那さんはゴジラシリーズの特撮美術監督。とても有名な方で、昭和の特撮美術と言えば井上泰幸さんと言われる方。その方が 7 年前に亡くなって、その歴史あるスタジオが取り壊されるという事を聞いて遺族の方と一緒に荷物整理をすることになったのです。 このまま何もせず、この歴史の詰まった素晴らしい空間が無くなってしまうことに耐えられず、なんとか展覧会を作って、ご夫婦の素晴らしさを地域の多くの方に知ってもらい、記録を残したいと考えました。

—小さい時から知っていたのですか？

いえ、全く知らなかったです。没後 5 年経ってから、知人を通じて知りました。興味が強くなったのも私は元々特撮映画が好きで、中でも好きな「ゴジラ対ヘドラ」のヘドラという怪獣のデザインをしたのが井上さんでした。そのデザイン画がとてつもなく魅力的なのです。井上さんを始め、当時の職人の方々は現在も続く特撮映画の礎を作った、映像技術の発明家みたいな方々です。 彫刻家である奥様である玲子さんの作品も凄まじくて。私は玲子さんの作品にもとても共鳴しました。さらにご夫婦は晩年、当時は珍しく子供たちとのワークショップや、お庭で地域のアーティストとグループ展も定期的に行われていて、近所の方々から

とても慕われていた方だったそうです。一部の仲間内で楽しむのではなく地域との関わり方にも感銘を受けました。
奥さんも８年前に亡くなっているのですが、何百点もの未来的で美しい巨大な彫刻作品がアトリエに残っていて、作品の死後の扱いについてもいろいろ考えることがあり引き込まれていきました。それで解体前のスタジオで夫婦をテーマに作った映像と立体作品を、ご夫婦のゆかりの品々と一緒に構成し、最後の最後に展覧会を作りました。

「アルファ企画解体復活大作戦」youtube
https://www.youtube.com/watch?v=nGGx1WZD5nk

たとえ小さい頃からお二人の存在を知っていたとしても、自分がそれに気づける経験や、感性がないと面白さに気がつかなかったと思います。私の地元には美術

館は無く、文化的な活動はないのかと思っていたところに、心から尊敬できる生き方をした方々を知る事ができた。そのご夫婦の思いを展覧会を作ることで、たくさんの人々と共有できたことがとても嬉しかったです。小さな小学校くらいはありそうな巨大なアトリエ全体を使った展示だったのでさすがに１人では手に負えず、地域の方々や大学の同級生に助けていただき、お陰様で展示は大成功だったと思っています。

―それで地元に対する距離感っていうのは変わりましたか？

私は地元にあまり愛着が持てなかったのですが、「アルファ企画解体復活大作戦」を開催したことで地元でたくさんの方と一緒に大切な思い出が作れたことは私にとって大きな出来事でした。井上夫婦を知ったことによって、今まで出会うことのなかった素晴らしい地元の方々や、価値観を共有できる方々と親しくなることができて、それは何よりも大切な繋がりです。あと井上さんのことをよく知っている、日本映画の第一線で活躍している方々とお会いする事ができ、とても刺激を受けました。今はもう真っさらな更地になってしまったんだけど、海老名という土地にとっても、特撮映画史にとっても貴重な一つの時代の区切りを記録することができて、よかったと思います。井上さんの作品群や、アルファ企画の造形物は保管先が決まり、玲子さんの彫刻作品群は遺族の方が倉庫を借りて、そこにしばらくは保管されることになりました。ゆくゆくは公共機関や美術館など、次世代に残せる環境を探すようです。とても素晴らしい作品なので、できるだけ行先を見届けたいと思っています。

―我々樽前 arty+ も地域性とどのように向き合っていけばいいのか試行錯誤を続けながら活動しています。安田さんが地元の活動や今回の苫小牧での活動の中で気をつけたことってなにかありましたか。

その土地に暮らす方の大切な風景や、思い出とはなんだろうと常に考えていて、苫小牧の歴史や自然に詳しい文子さんとの出会いはとても幸運でした。苫小牧市

美術博物館の所蔵品も、地域を見つめたとても素敵な作品がたくさんあり、古くから港としての歴史もある。大まかな歴史を知った上で、最初に受けた印象を大事にする事を重要視していました。 それはずっと暮らしていると見えない事かもしれないので。今回の滞在制作でこの地域や、出会った方々が大好きになってしまったので、これからはより深いところを映す表現をしてみたいと考えています。

―最後に今回の展覧会をどのような方達に、またどのように見てほしいですか。

会場が公立の美術博物館ということでいろいろと気を使って作った展覧会なのですが、地元の方々はもちろん、苫小牧のことを全く知らない外から来る方々にも届くように、苫小牧の方々のお力をお借りして作った展覧会です。是非多くの方に見ていただきたいです。

Photo：Fuyuko Satoh

「WIND BIRDS」展覧会情報

主催：苫小牧市美術博物館
〒 053―0011 北海道苫小牧市末広町 3―9―7
電話 0144―35―2550　　FAX　0144―34―0408
URL: http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutsukan/
会期：2018 年 7 月 14 日〔土〕―9 月 24 日〔月・祝〕
開館時間：9:30―17:00　※入場は 16:30 まで
※ 7/27（金）・28（土）、8/24（金）、9/14（金）は 20:00 まで開館
休館日：月曜日　※ 9/17(月・祝）は開館し、9/18（火）は休館

観覧料：
（特別展会期中）
一般 600（500）円／高校・大学生 400（300）円／中学生以下無料
（特別展会期以外）
一般 300（240）円／高校・大学生 200（140）円／中学生以下無料

インタビュアー
　藤沢レオ、千葉和魂 (樽前 arty+)

編集・構成
　門馬羊次 (樽前 arty+)

PONARTY（ポナーティ）

住　　所／苫小牧市字樽前 114
ホームページ／ http://tarumae.com
発　行　日／平成 30 年 7 月
発　行　所／ NPO 法人樽前 arty プラス
発行責任者／藤沢レオ
装丁・デザイン／堀米和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。

[PONARTY の由来]
　PON : アイヌ語で「小さな」の意。
　ARTY :（米）芸術家気取りの意。

拠点となるアトリエの目の前に流れる「ポン樽前川」というキャッチーながら地域性を感じさせる清流の名から派生した造語であり、樽前 arty の小さな活動という位置づけの文芸論評誌として名付けた。